

## “虚業家”高柳淳之助による似非・企業再生ファンドの挫折

ハイ・リスクの池上電気鉄道への大衆資金誘導システムを中心に

小川 功

はじめに

情報化社会の現在にあっても架空の皇族，外国の元大統領，元大統領夫人などの訳ありの“著名人”を広告塔に使う，地方の小口投資家をすっかり信用させた「グランドキャピタル」事件など，怪しげな利殖商法の横行が報じられている。同事件では博士号を申請しようとするインテリ層までが米国のもっともらしい架空大学を名乗った巧妙な商法に幻惑されたと伝えられる。

実は大戦景気による大正バブル経済が崩壊した大正末期から昭和初期にかけての恐慌期にも零細な庶民多数が被害者となった，大掛かりな詐欺的不正金融事件が続発し，深刻な社会問題となった。当時の『東京日日新聞』は社説で「不正金融業者が現れて，経済の事情に通じない，地方農民や，都会の小所得者に棚ぼた式の利殖方法を宣伝してその金銭の寄託を受け，結局はこれを横領着服して不正の利得をほしいままにすることがはやってゐる」(T14.10.23東日)と警告した。例えば重役・幹部行員による300余万円もの背任事件から業務停止となった帝国実業貯蓄銀行事件<sup>1)</sup>をはじめ，同行の100万円もの無担保貸付先でもある株式取引業者・広瀬大橋<sup>2)</sup>の株式詐欺事件，銀行条例・貯蓄銀行法違反で営業停止を命じられた吉川長之助理事長

の貯金一新匿名組合事件(京橋区八官町，預金高330万円，退役軍人など被害者200万人)，休業銀行の整理を引き受けた悪徳弁護士による日東銀行事件(13年11月24日新規取引停止処分，140万円の月掛貯金を費消)，「百姓たちの泣き寝入り」をもたらした熱海宝塚土地<sup>3)</sup>，日本勸業債券部他33業者など枚挙の暇がないほどである。

これらの諸事件と並んで，当時「今誰れ知らぬものなき全国的」(p55)事件として世間から注目されたものに高柳事件がある。これは貴族院議員・高柳淳之助が反動恐慌以降も「真に利殖の奥義を会得したものにあっては，此時こそ将さに大に乗ず可き千載一遇の資産増殖好機であって，斯様な時勢を逆に利用するのぞなければ真の資産増殖は出来ない」(T11.7.8読売 広告)と盛んに宣伝して，「日本農工債券会社，日本製薬会社その他多

2) 広瀬大橋(日本橋区南茅場町)は現株問屋・広瀬大橋商店主，金融部，調査部を置き，『現株世界』『広瀬日報』を発行(T8.3.25朝日)し，9年ごろ一般取引員を開業した。(商,T15,p625)広瀬は帝国実業貯蓄銀行頭取らを「数十軒の待合で...その都度会合し饗応...約五万円の贈与」(『銀行犯罪史』昭和11年,p232)により無担保で100万円の貸付を受けた模様

3) 熱海宝塚土地(9年7月設立，後に日洋土地興業と改称)は「陋劣卑劣の詐欺漢」「松島筆がつまらない荒蕪地を二束三文で買って置いて，『別荘の最好適地』といふ大風呂敷で組織した会社である。会社ができるとすぐに自分の買った土地を二十倍にも三十倍にもして会社へ売りつけて，まんまと私腹を肥やした。だから彼れ松島だけがうんと儲けて，会社は丸損」(p86)となった。

1) 京橋区，昭和2年1月20日破産宣告，預金者30万人，預金総額2,000万円。『銀行犯罪史』昭和11年，p231以下参照

数の株式会社を設立したが、池上電気鉄道の拡張事業資金獲得のために幽霊会社を更に設け、空株を発行」(S9.12.28朝日)して、「日本全国幾万の民衆から零碎な資金を欺き集めて、その育血により、十三会社を組織し、それを片っ端しから食ひ荒して私腹を肥やし」(p115)た結果、被害額300余万円、被害者も数万人にのぼる空前の「貯金魔」事件である。高柳事件の主人公は被害金額はともかく、巧妙なる手法を縦横に駆使した点では英国のジョージ・ハドソン、米国のロバート・スカイラー<sup>4)</sup>など19世紀を代表する悪名高い英米の“虚業家”にも遜色ない存在ではなかろうか。

本稿では貴族院議員・代議士等の金看板を悪用して、架空に近いとも解される泡沫会社を十数社も捏造して、自己の主宰する利殖雑誌で推奨して多数の零細投資家に甚大なりスクを負わせた高柳事件を、主人公の高柳が彼の最盛期に最も注力した大口投資先である池上電気鉄道の再生と挫折を中心に解明してい

- 4) C.P.キンドルバーガー『熱狂、恐慌、崩壊 金融恐慌の歴史』平成16年、日本経済新聞社、p125  
 5) 高柳事件、貯金一新事件に続き、15年5月頃星一事件を取調べた中島吾次郎警部補は警視庁刑事部捜査課で経済犯罪を専門にしていた「警察関係者としてきわめて異色な、ふしぎな男」(星新一『人民は弱し官吏は強し』平成7年、新潮社、p246)と評されている。中島警部補は高柳「事件の取調べ終ると間もなく辞職して、その後高柳事件の被告の依託を受け預金の回収等に奔走」(T2.3.26朝日)、在任中の地位を活用して債権取立業を開業して「高柳事件の被害者は私まで申し込んでくれれば、出資金の四割まで回収してさしあげる。ただしあとは手数料としていただく」(前掲『人民は弱し官吏は強し』、p245)との広告を東京日日新聞に出した。朝日新聞も「かって同事件をしらべた中島元警視庁警部補が被害者救済のため立ち、却て種々風聞を生みだした状態」(T2.2.24朝日)と報じた。しかし「心血を注いで糾弾に努め内容の複雑と手段の巧妙なために取調べが困難に陥り幾度も脳貧血で倒れた」(T6.5.1読売)中島右雄は「さき頃不慮の死を遂げた」(T6.5.1読売)とされる。

くこととしたい。警視庁の中島元警部補<sup>5)</sup>、検事局の窪谷検事ら職責として高柳を調査した司法当局者のほかにも、高柳事件に着目して熱心に調査したジャーナリストが多く存在した。本稿で使用した基礎資料は司法当局による「予審決定書」のほか、こうした記者による記事や著書と関係者の自伝<sup>6)</sup>である。たとえば電気事業の専門誌である『交通と電気』誌の記者・巨海省吾は池上電気鉄道の取材を通じて、「種々なる意味に於て世人に多大の教訓を与へつつある」高柳事件の主人公「高柳社長の人物の一端を書いて見たい」と

- 6) 本稿では頻出する基礎資料は以下の ~ の番号で本文中に示した。(姉妹編と共通)

「予審決定書」(抄録が昭和6年5月1日読売新聞掲載)、巨海省吾「池上電気鉄道に就て」『交通と電気』2巻10号、大正12年10月、「利益保証。買戻特約。有価証券の売出し」『福の神』付録、大正14年夏、高柳金融、巨海省吾「池上電気鉄道と高柳淳之助君」『交通と電気』4巻10号、大正14年10月、深海泡浪『疑問の高柳淳之助』大正14年、文王社、大浜孤舟『暗黒面の社会・百鬼横行』大正15年、新興社(「野依秀一と有田音松」、「陋劣卑劣の詐欺漢松島肇」などとともに「稀代の吸血漢高柳淳之助、得意の絶頂より失意のドン底へ」を紹介)、高柳淳之助『家を富ます道』昭和30年、東京ライフ社、深海豊二『日本金融太平記』3『経済往来』昭和32年9月、高柳淳之助『事業を生かす頭』昭和33年、東京ライフ社、高柳淳之助経歴(『事業を生かす頭』p158~160所収)、『東京急行電鉄50年史』昭和48年、「鉄道免許東京横浜電鉄<元池上電気鉄道>巻一~巻三」『鉄道省文書』大正3年~15年、「大正九年三月調 事業進捗調書」(2-1)。なお『鉄道省文書』営業編の池上電気鉄道の営業報告書は交通博物館では確認できなかった。

また同様に新聞雑誌、会社録等も以下の略称で本文中に示した。(雑誌類)『ダイヤモンド』...D、『東洋経済』...T、『エコノミスト』...E、『東京日日新聞』...東日、『東京朝日新聞』...朝日、『萬朝報』...萬、『東京毎日新聞』...東毎、(会社録・紳士録等)『日本全国諸会社役員録』...諸、『銀行会社要録』...要、『帝国銀行会社要録』...帝、『株式年鑑』...株、『日本紳士録』...紳、『帝国信用録』...信、『商工信用録』...商、『会社通覧』大正8年末...通

して、大正14年10月3日「池上電気鉄道と高柳淳之助君」という交通専門誌には異色の記事を書き上げた。

高柳の本業は広義の金融業者であるが、直接銀行には関与せず、証券業務に類似した行為を手広く行ったが、株式仲買人でもないためか、銀行証券等の研究者にも捕捉され難い存在といえよう。管見の限りでは麻島昭一氏が高柳を、「茨城県選出で、金融業を職業とし、地方鉄道、土地会社などを経営していた」<sup>7)</sup>代議士で、信託法案の審議にかかわった委員として着目している程度と思われる。しかし信託会社を広く考察されている麻島氏も高柳信託には言及されていない。<sup>8)</sup>

高柳に言及した数少ない先行研究のいまひとつに中川浩一氏による一連の茨城県民営鉄道史研究がある。中川氏は行方鉄道筆頭発起人の「高柳淳之助は、東京市麹町区で信託会社をはじめ、手広く事業を手がけ、茨城県内では筑波山鋼索鉄道の社長を勤め、筑波鉄道には高柳合資会社の名義で大株主となっていた。村松軌道にも、投資した」<sup>9)</sup>と、彼の事業を的確に概観した。ただし中川氏の関心は茨城県内での鉄道投資にあるので、残念ながら高柳の県外活動は分析対象となっていない。また池上電気鉄道に関する歴史研究としては『池上町史』『大田区史』『東急50年史』など<sup>10)</sup>相当数存在するが、高柳にまで言及したものは『東急50年史』などごく一部であ

7) 麻島昭一『日本信託業発展史』昭和44年、有斐閣、p129

8) 麻島氏編纂の『本邦信託文献総目録(戦前の部)』の会社別目録には群小信託まで丹念に網羅されているが、高柳信託の文献は収録されていない。

9) 中川浩一『茨城の民営鉄道史』中、昭和56年、筑波書林、p143

10) 吉川文夫「池上電気鉄道の初期車両とその行方」『Railfan』別冊2号、宮田道一「東急池上線の60年を辿る」『鉄道ビクトリアル』通巻381号、昭和55年10月、p61～64

る。こうした先行研究の現状を踏まえ、資料不足ながらも今回筆者の“虚業家”研究<sup>11)</sup>の一環として取り上げることとしたい。

なお高柳個人の属性ならびに同類の彼の配下の盛衰については姉妹編「“虚業家”集団『高柳王国』の形成と崩壊 - 大衆資金のハイ・リスク分野への誘導と収奪 -」(『彦根論叢』第351号、平成16年11月)を参照されたい。本稿作成にあたっては麻島、中川両氏の先行研究からのご示唆のほか、資料面で国立公文書館、都立中央図書館東京室、太田区立郷土博物館、社団法人洗足風致協会綱嶋滋氏、東急電鉄広報室、京成電鉄広報課、和久田康雄氏などの諸機関・各位のご教示・ご配慮を得た。

本稿は滋賀大学リスク研究センターの各研究分野のうち、筆者の所属する金融リスク等に関する共同研究プロジェクト成果の一部である。各位のご支援に謝意を表する。

## 池上電気鉄道の沿革

池上電気鉄道は蒲田～五反田間11.02kmを「半環状を描いて走」<sup>12)</sup>り、雪ヶ谷～新奥沢1.41kmを営業する1,067ミリの電気鉄道であったが、路線の建設は通常ありそうな山手線との接続点である五反田からではなく、都心から遠い蒲田から都心方向に向かって小刻みに開業し、結局昭和9年並行する目黒蒲田電鉄に合併された。<sup>13)</sup>

池上電気鉄道は「本社線の如きは目黒より

11) “虚業家”に関しては拙稿「『企業家』と『虚業家』の境界 - 岩下清周のリスク選好度を例として -」『彦根論叢』第342号、平成15年6月参照

12) 『池上電気鉄道沿線名勝案内』昭和2年10月時点

13) 和久田康雄『資料・日本の私鉄』昭和51年、p70。合併時の車両数は電動客車22両であった。

洗足池、矢口、池上を経て、一方は大森に、一方は蒲田に出づる沿道悉く土地高燥空気清澄風光佳絶、加之名所旧跡名刹に富み、飲料水には玉川水道会社<sup>14)</sup>あり、住宅地の経営には田園都市会社、荏原土地会社<sup>15)</sup>等の設けあり、郊外居住地として実に近郊第一の優勝地」(新株募集広告T10.3.13読売)たるを自負していた。

池上電気鉄道(7哩)は当初は「馬車鉄道の計画であったが、其の後...電気鉄道に変更」<sup>16)</sup>し、日蓮上人ゆかりの本門寺、洗足池をはじめ、沿線に点在する「人ノ普ク知ル如ク周歳賽人跡ヲ絶ザル霊場」<sup>17)</sup>たる目黒不動尊、御嶽神社などの社寺名勝の参詣者への便宜を謳い、「少時間ニ於テ目黒、洗足池、池

上、大森ヨリ<sup>マ</sup>河崎大師、羽田稲荷ニ連絡シテ回遊スル」<sup>18)</sup>参詣鉄道として、大正元年12月25日松方五郎を発起人総代として、石丸龍太郎、久保勇、山田敬徳、石黒慶三郎、五明直温、八木恒三<sup>19)</sup>の各発起人により「府下大森駅より池上村を経て目黒停車場に接続の目的」(T5.5.18読売)の軽便鉄道として発起され、3年4月8日荏原郡大崎村(目黒停車場付近)～入新井村(大森停車場付近)間6

14) 玉川水道は財政難に陥った荏原水道組合の事業を継承して、7年2月15日資本金30万円で設立されたわが国最大級の私営水道会社で、池上地域では洗足池と馬込村の間に位置する小池に近接して水源の貯水池を有していた。(『池上電車案内』) 田園都市も上水道はこの玉川水道に建設費を補助する形で整備した。なお田園都市創立メンバーの星野錫は大正5年9月末現在の池上電気鉄道発起人・賛成人100株主

15) 荏原土地(日本橋区小舟河岸二丁目)は「名勝地洗足池畔を中枢として付近に一般土地経営を目的」(『増田ビルブローカー銀行旬報』第5巻8号、9年3月)として資本金100万円で設立され、池上電気鉄道の池上駅に近接した住宅地・遊園地の翠紅園を経営(『池上電車案内』)するほか、東京競馬倶楽部が池上に明治39年に開設しわずか3年で閉鎖に追い込まれた池上競馬場跡地を活用し、洗足池畔に約3万坪の住宅地・洗足園を経営、園内に料亭「水光亭」まで開設した。(『洗足池』平成7年,p182) 洗足池の周囲には「近時某外人及某紳縉八池畔ヲ選ビテ新タニ宏壮ナル別墅ヲ作り」(『池上電気鉄道発起趣意書』、1-1)、洋風の住宅が建ち並ぶ「荏原土地会社の経営地は...<池上競馬>場内の一部」(『池上町史』昭和7年,p170)とされる。なお荏原土地社長の綿貫助次郎、荏原土地監査役の森久太郎の両名は10年時点で池上電気鉄道「相談役並に重なる株主」で、取締役の藤倉桂助は10年時点で池上電気鉄道監査役を兼ねた。

16) 77) 80) 『昭和国勢人物史』昭和5年,p89~90  
17) 18) 『池上電気鉄道発起趣意書』(1-1)

19) 松方五郎は明治維新の元勳・松方正義の子で松方幸次郎川崎造船所社長の弟。常磐商会、東京瓦斯電気工業、広島瓦斯各社長、東洋海上保険、東海生命各取締役(帝T5,p188)、東海生命各社長(帝T11,p383)川崎系の嵐山電車軌道の大阪延長線申請でも「松方五郎氏を通じて現内閣の責任者とは他出願者よりは一層密接の関係あれば、其力は軽視すべからず」(T2.4.3大毎)と見られていた。資産8万円(大正2年12月25日「発起人身元調書」東京府、1-1)/石丸龍太郎は帝国製油取締役、日本競馬会理事(紳M41,p66)、無職、資産50.1万円(前掲調書)。なお東京競馬倶楽部は明治39年に池上競馬場を開設した。久保勇は松方伯の甥で明治33年に破綻した横浜蠶絲銀行頭取、東海生命専務(要,M44,p303)、北海道の硫黄鉱山をはじめ「各種の事業に関係せる上に猶投機社会に出入し、現に本年春東京馬車鉄道会社株式二千株を買入れしに其相場二百四十円にて買入れたるもの百五十円位に下落し、また北海道炭礦鉄道会社株、日本郵船会社株等の売買にて非常の損失を為したる噂」(M33.12.15銀行通信録)があった。「価格約十五万円ノ鉱山、動産十万余、他二宝田石油株三五〇株、東海生命株一〇〇株、東洋火災株三〇株、日本傷害保険株一〇株、外二年取得金一万五千元ヲ有ス」(前掲調書)/山田敬徳は原敬首相の秘書官を務めた原敬の番頭格、大阪新報社長兼編集長(『最近之大阪市』大正元年,p387)、日東商会取締役(要,M44,p326)、大野瓦斯マンツル社長(帝T5,p175)、資産1.5万円(前掲調書)/石黒慶三郎は会社員、資産5万円(前掲調書)、共立電機電線専務、荏原土地相談役/五明直温は会社員、華族家扶、資産3万円(前掲調書)/八木恒三は会社員、他の発起人の信用程度が厚ないし普通とされる中で「信用程度不明、資産約二万円ヲ有スル由」(前掲調書)と記載され、同一人と目される八木恒蔵(新潟市大川前通十二番町)は11年では池上電気鉄道取締役のみ(帝T11,p346)

哩32鎖を免許され、動力電気、軌間3呎6吋、軌条45封度、建設資金40万円の軽便鉄道<sup>20)</sup>として4年10月中旬に線路実測を終えた。

「延期願」の中で石黒慶三郎は8,000株中71.5%の5,720株は発起人・賛成人30名で引受け、残りの2,280株の「発起人以外ノ株主八本鉄道線路使用地ノ地主及沿道ノ有力家並ニ池上本門寺檀徒、御嶽神社信徒ノ重ナル者ニシテ他ニ向ッテ募集スルノ必要無之」( 1)と、株主募集に自信を見せ、「既に鉄道院の認可を受け会社成立の歩を進めつつあるが、来十月本門寺御会式までには一部開通の運びに至るべし」(T5.5.18読売)と希望的報道があった。しかし現実には4年9月中心人物の松方五郎、石丸龍太郎が発起人を脱退したり、池上電気鉄道発起人・賛成人100株主でもある星野錫ら田園都市経営協会メンバーから用地買収「契約ヲ終ル迄数月間本会社設立ノ延期ヲ求メ、且協会ハ今後鉄道会社ト相提携シ充分ノ援助ヲ為スト共ニ其株ノ一半ハ協会発起人ニ於テ負担スヘシ」( 1)との申込みを受けたために大幅に遅延し、ようやく6年6月24日資本金40万円で有楽町一丁目三番地に設立された。

設立時には社長に山口文右衛門<sup>21)</sup>、常務

- 20) 『大正五年度鉄道院鉄道統計資料』監督編,p13。  
『帝国鉄道要鑑第四版』6年,p321では目黒停車場~大森停車場間6哩71鎖
- 21) 山口文右衛門(千葉県銚子町)は山口電線工場主、大正6年12月12日池上電気鉄道代表取締役辞任、11年では化学豆油、東洋繊維工業、第二東海ラミー紡織各取締役(帝T11,p362)
- 22) 諏訪方季は千代田染料合名代表社員(帝T5,p292)、大正6年12月12日池上電気鉄道取締役辞任
- 23) 原田金次郎(京橋区松川町)は明治30年8月設立の原安商会主(『電気大観』5年,p31)、気仙水力電気取締役のみ・350株(諸T5,p29,帝T5,岩手p10,下p584,要T11,中p69)。池上は「曩キニ変電所建設ノ際...原安商会ヲ通シ芝浦製作所ヘ注文」(11年10月4日付高柳社長名の「御請書」)した。

に八木恒蔵、取締役には諏訪方季<sup>22)</sup>、原田金次郎<sup>23)</sup>、石黒景文<sup>24)</sup>、武永常太郎<sup>25)</sup>、監査役に堀内良平<sup>26)</sup>、志村保一<sup>27)</sup>、藤倉桂助<sup>28)</sup>が就任した。

原田、武永両取締役が取締役を兼務する気仙水力電気<sup>29)</sup>との関係について言及すれば、原田の原安商会は電気諸工事設計請負、電気器具製作販売業者で、気仙水力電気の場合と同様に、池上電気鉄道でも変電所工事の設計請負や電動発電機、配電盤等の納入を行った。

しかし「実業界に縦横の画策を試み、工業に電業に殖林に其旺盛なる努力を傾注」<sup>30)</sup>、「随所に気鋒を表はし」<sup>31)</sup>次々に関係企業を乗換えるなど、ムラ気な山口社長が設立後わずか5カ月の6年12月に辞任したため、八木常務が専務となって会社を代表した。しかも山口前社長、八木専務とも住所が遠隔地で、特に八木は「信用程度不明」( ,p171)、取引先の信用の程度は5段階中の下から2番目のD a (商,T7,p374)とされるなど、池上電

24) 石黒景文は電気諸機械製造販売業者(『日本電業一覽』明治45年,p571)で、荏原土地相談役の池上原始発起人・石黒慶三郎の関係者と思われる。

25) 武永常太郎(京橋区三田四国町)は気仙水力電気取締役技師長350株(諸T5,p126,帝T5,岩手p10,下p584)、池上電気鉄道主任技術者、15年4月末現在池上旧200株主

26) 堀内良平は富士身延鉄道取締役、大日本葡萄酒監査役(帝T5,p43)、東京乗合自動車専務、大正6年12月12日池上電気鉄道監査役辞任

27) 志村保一(牛込区弁天町)は2年質屋を開業(信T14,p350)、戦友共済生命、東京輸出メリヤス、東亜貿易、中外貯金銀行、日本農産工業、鮫湾商会各監査役(帝T11,p540)

28) 藤倉桂助(下大崎)は電線製造業、荏原土地取締役(帝T11,p408)

29) 気仙水力電気は3年2月3日事業許可、4年5月岩手県盛町に資本金10万円で設立、5年9月17日開業。8年時点で資本金50万円(うち払込33.7万円)、積立金1.5万円、利益金2.4万円、配当率5.7%(帝T5,岩手p10,『電気大観』5年,p497,『東北地方電気事業史』p111~)

30) 31) 『大日本実業家名鑑』8年,p28

気鉄道の経営陣には迫力が欠けていた。6年時点では資本金40万円、払込8万円、8年時点では資本金40万円、払込15.4万円、利益800円、積立...、配当...、社債...であった。(通,p140)9年時点では池上～蒲田間の第一期線「出願ノ際八沿道村民ノ非常ナル歓迎ヲ得」<sup>32)</sup>て用地買収も進捗し、目黒駅～大森駅9哩を予定し、資本金40万円、払込21.6万円、借入金23,500円、本社有楽町1の3、代表者は八木恒蔵であった。

池上電気鉄道は「目黒より荏原郡大塚千本松を経て大森に達する」(T10.11.4読売)免許線を持ち、「目黒市内電車終点より洗足池、矢口、池上を経て、大森又は蒲田に出づる線路敷設の計画中」(T10.3.15読売)であった。8年10月期の『営業報告書』でも会社側は「第一期ノ開通ハ愈々近キニアルヘク」<sup>33)</sup>と盛んに期待を持たせたが、「未だ全く工事に着手せず」(T10.11.4読売)、「会社の第一回払込金は殆ど冗費してゐたので、予定の工事を遂行するには更に株金を払込ませ、次で増資しなければならない状態」( )であった。このため、9年12月17日「五十五万円ヲ蒲田、池上間建設費ニ、九十万円ヲ大森、目黒間改良工事費(主トシテ複線)ニ充当スル」<sup>34)</sup>として9年12月17日145万円増資の認可を得て、「今回資本金四十万円を百八十五万円とし...増資二万九千株の内五千株を割きて十日より二十三日迄一般募集に附す」(T10.3.15読売)こととし、10年3月15日増資145万円中の5,000株の増資新株を公募した。会社側も「本鉄道建設ニ就テハ往々遅延ノ批難ヲ免レサリシ」<sup>35)</sup>と認めるように、新株募集広告でも「本社線の一日速かに敷設を要する所

以にして、既に過半の材料と敷地とを準備し得たる本社が増資完了後、昼夜兼行工事の速成を期し本年内に一部の開通を見んとする」(T10.3.13読売)と遅延の弁解をしている。募集の取扱銀行・証券には東海銀行、帝国商業銀行、神田銀行、東京古河銀行などのほか、東京現物団の山叶商会、岩井商店、志村監査役が関係する中外貯金銀行<sup>36)</sup>なども含まれていた。この時の役員陣は末尾の[表-1]の通りである。

この時期の役員のうち取締役の藤倉桂助、相談役の綿貫助次郎、森久太郎は沿線で開発中の荏原土地の役員、相談役の石黒慶三郎、田沢巳之吉らは池上電気鉄道の市内乗入線の経過地の地権者等で、石黒は老舗の電気諸機械製造販売業者でもあったので関与の目的が明白である。これに対して取締役の田中庄一郎は大正8年11月4日付で田中電機社長の立場で八木専務と30.1万円の「電気鉄道工事請負契約書」を契約し、10月4日付で保証金として15万円を受領した。( )田中が社長を兼ねる秋田電気軌道の本社が秋田からはるばる田中の住所のある大阪に移転されていた「田中社長時代ニ借入金アルニ不拘、帳簿ニ記載セラレサリシ」<sup>37)</sup>簿外負債160,060円が発生して、債権者から「田中社長時代ノ物品購入代金ニシテ訴訟中...」<sup>38)</sup>など訴訟が連発し、昭和2年頃には秋田電気軌道は「一時ハ破産デモスルカト言ハレル迄悲況ニ陥」<sup>39)</sup>り、運転休止に追込まれるなど、いささか問題含みの三流以下の私鉄経営者でもあった。おそらく田中は車両、電気機器の納入のみを目的として秋田電気軌道のような破綻寸前の地方私鉄にまで関与したものと思われ、池上

32) 大正9年4月30日付「復命書」技手早崎金七( )

33) 35) 池上電気鉄道『大正八年度下半年営業報告書』p2

34) 「増資ノ経緯」( 3-38 )

36) 池上電気鉄道は大正9年4月中外貯金銀行に「為替手形ニ対スル利子」1,130円を仮出金として支出していた。( )

37) 38) 昭和4年『鉄道省文書』秋田電気軌道

39) 秋田電気軌道『第80回営業報告書』

電気鉄道への関与も同様であったものと推測される。逆にいうと、池上電気鉄道の信用度は秋田電気軌道と同程度であったことなる。電気諸機械製造・輸入商の吉村鉄之助の関与目的も同様であろう。また田中庄一郎に次ぐ第二位の大株主・山本唯三郎は“虎大尽”として有名な船成金、炭鉱主で、本門寺に隣接した池上村堤方に“池上御殿”と称された1.3万坪もの恵影山荘(幸運をもたらした保有船名に因む)を3年から数年がかりで築造中(T7.9.7朝日)であった。「栄花の夢の跡あはれ」「大正九年の財界恐慌と同時に、ほとんど一瞬間に没落」(S2.4.19朝日 訃報)したので、10年3月の時点では地縁があるとはいえ池上電気鉄道へ、もはや大口投資できる余裕などなかったものと思われる。いずれにせよ、当時の池上電気鉄道の役員・大株主には信用度の高い者は乏しく、増資のメドがたったとの主張は疑わしい。

10年5月18日池上駅予定地で第一期線池上～蒲田1.8kmの起工式を挙行した。10年5月31日の総会で鉱業家の芳川寛治<sup>40)</sup>が池上電気鉄道取締役、6月21日付で社長に就任した。芳川の評伝には芳川家の名家たる来歴が延々と講釈される反面、本人の履歴はほとんど触

40) 芳川寛治は明治15年5月生れ、先代顕正の養子となり、大正9年2月襲爵した伯爵、養妹トミ(明治15年5月生れ)は男爵藤田平太郎夫人(『財界人物選集』昭和4年、よp11)明治38年東京高商卒、京城瓦斯電気、三井物産を経て、磐城礦業社長、日本鉄工所監査役、大正11年時点で台湾炭礦代表取締役、北海道万年木炭、足利紡績各取締役(帝T11,p217)、昭和4年時点では台湾炭礦社長、磐城礦業会長、足利紡績取締役(『財界人物選集』昭和4年、よp11)、14年時点で熱河鉱業社長、足利紡績、朝鮮産金各取締役(『財界人物選集第五版』昭和14年,p444)芳川寛治事務所を東京海上ビルに置いた。(『丸之内紳士録』昭和6年,p278)。なお高柳は「運転手に妻を寝取られて新聞で大騒ぎされた」( ,p22)と指摘するが、詳しくは加藤秀俊『明治大正世相史』昭和42年、社会思想社,p190参照。

れられていないなど、経営手腕は概して未知数である。しかし信用の希薄な泡沫企業にとっては伯爵様という世間体の良い、便利な看板社長として担がれた可能性もあろう。

## ・高柳淳之助による池上電気鉄道支配

### 1. 高柳淳之助による鉄道関与

#### (1) 筑波山鋼索鉄道

高柳による池上電気鉄道への関与とほぼ時を同じくして、高柳の郷里の茨城県筑波山、鹿島地域の鉄道企業へも積極的に関与した。まず筑波山鋼索鉄道は小林恒一郎(茨城)ら数名の発起による筑波登山電車株式会社(資本金24万円)が筑波町地内で1哩30鎖のケーブルを申請したことにはじまる。高柳が中心となって筑波登山鉄道を発起し、11年11月16日に免許され、翌12年4月4日資本金35万円で筑波山鋼索鉄道が設立され、12年4月14日登記された役員は取締役高柳淳之助、小林恒一郎(茨城)、鯨井謙吉、鈴木虎次郎、谷口真平、監査役藤咲英次郎、猪瀬蔵太郎、箕輪盛夫であった。14年10月12日宮脇～筑波山頂1.6キロを開業した。<sup>41)</sup>中川浩一氏が「筑波山鋼索鉄道の経営には、筑波鉄道が早くから関与し...両社が密接な関係を保とうとするのは、当然」<sup>42)</sup>との指摘通り、筑波鉄道役員・株主多数が参加し、当時81.5万円もの借入を抱え、資金繰りが窮屈だった筑波鉄道は昭和2年上期に同社へ30万円もの大口貸付を敢行<sup>43)</sup>するなど、「筑波山鋼索鉄道の経営に参画」<sup>44)</sup>し、一体関係にあった。同社の筑鉄借入は興銀借入に切り替えられたが、筑鉄は依然連帯保証し重荷に苦しんでいた。

41) 43) 44) 『関東鉄道七十年史』平成5年、p140,145,293

42) 中川浩一『茨城の民営鉄道史』中,昭和56年,p166-7,筑波書林

## (2) 鹿島参宮鉄道

筑波山鋼索鉄道に続き、鹿島参宮鉄道は当初、高柳の出身郡名たる行方鉄道の名で高柳が中心となって発起され10年12月12日免許、11年9月3日設立され、同日鹿島参宮鉄道に改称した。高柳は雨宮敬次郎が郷里の山梨県を目指した甲武鉄道設立の話を伝記で読み、「それに刺激されて私も私の郷里に汽車を引いて見たいと考えた」( p15)として、「汽車を引いて金を儲けたいという考えは少しもなかった」( p18)と自賛する。高柳が主宰する高柳信託が6,280株(31.4%)を引受<sup>45)</sup>け、高柳が社長に就任し、彼を政界へ誘った水戸選出の代議士小山田信蔵<sup>46)</sup>も取締役として名を連ねた。これは高柳の「雑誌『富之研究』誌上に鹿島参宮鉄道の計画を発表し、その株式を募集した、ところが意外にも私の引受けた五十万円はたちまち満株になってしまった」( p16)という高柳式利殖法の一例であった。さらに高柳第二信託を創立をして「工事資金捻出のため...鹿島参宮鉄道にも仮出金名義で七千二百余円を貸付け、建設資金に供した」( )が、高柳は「沿線の一番景色のよい所、霞浦の沿岸立花村に停車場を作る事にし...そこに桃を植えて桃の名所とし遊園地を作って客を呼ぶ考え」( p16)を打ち出したり、「霞ヶ浦を埋め立てて水田を作ると言って」( ,p86), 著書『遊金活用法』の中で「土浦地先霞ヶ浦湖畔六万余坪の埋立事業を行ってゐる」( T14.9.6東日)と称して高柳金融への出資の宣伝に利用した。現実には五十銀行取締役の岡本儀兵衛が「高柳君の埋立事業なんて跡形もない」( T14.9.6東日)と証言した通り、「虚構の宣伝」にすぎず、高柳は岡本の「やってゐる埋立予定地六万坪の

内既に完成した五千坪を五万円で売り渡し」( T14.9.6東日)を受ける形で、「茨城県霞ヶ浦の一部を埋立て、これを耕作地として売却」( )し、「土浦埋立地の売買に当って結局九万七千余円の不当利益を得」( )たものであった。

## 2. 高柳淳之助による池上電気鉄道支配

相次いで筑波山、行方などの発起に関わり、鉄道経営への関心を高めつつあった頃、たまたま城東電気軌道<sup>47)</sup>で「一挙二三十万円儲け...金儲けは電車に限ると...思った」( p22)高柳は城東買占めの成功体験が忘れられず、「同じ柳の下にドジョウがいないかと目を皿にして電車を見て歩いた」( p22)という。こうした折も折、10年9月池上電気鉄道が「資本金四十万円を百四十五万円に増資することになった時、淳之助は同会社をも経営せんと企て、高柳淳之助、武井勝利、田辺清蔵等の名義で、合計新株一万四千八百八十七株、旧株四千三百十株を所有」( )した。高柳個人としては200余株の株主に過ぎず( p57), 高柳が社長の高柳金融、日本農工債券(後述)が支配株主として君臨した。高柳の元事務員は「あれだけ毎日のやうに金が地方から来るのですから...」( ,p207)と、利殖雑誌を主宰して、儲け話に目の眩んだ地方客からの一任勘定を握る高柳の羽振りの良さを証言している。新株募集広告では池上電気鉄

47) 城東電気軌道は70円がらみの株価が荒川放水路の開削で分断されるのを嫌って、20円台まで急落していたのに高柳が目をつけて「買占に狂奔...大体総株に近い買占に成功」( p20), 大川財閥、渋沢財閥の面々に列して城東電気軌道重役に割り込んだ。高柳の方は「日本第一流の大実業家と交際が出来」( p21)ると大喜びしたが、はた迷惑な大川平三郎の方では高柳をグリーン・メーラー視して、彼の持株を高値で買い取り、高柳重役を「失格して免職」( p21)にさせた。

45) 62) 前掲『関東鉄道七十年史』,173

46) 小山田信蔵は拙著『企業破綻と金融破綻 - 負の連鎖とリスク増幅のメカニズム -』平成14年、九州大学出版会、p126以下参照



道は「郊外第一の発展地を貫通する有利有望なる交通機関にして、且つ政府より補給を得る特典あり」(T10.3.19読売)と宣伝した。当時の報道では「十五日より募集せる池上電気鉄道の募集成績は非常の良好にて株式一手引受の大口申込者ありて二十三日締切迄には意外の超過を見るならん」(T10.3.20読売)とされた。この一手引受者こそ高柳であろう。

10年9月24日臨時総会で資本金40万円を250万円に増加することを決議した。11年4月末の第10期決算では資本金185万円,うち払込金533,940円,総株数37,000株(40円払込の旧株8,000株,7円50銭払込の新株29,000株),借入金63,200円,「池上電車は芳川伯爵社長として土地買収に着手し」( ),10年9月27日嶺変電所が原安商会の請負で竣工したものの,「所期の効果をあげるに至らなかった」( ,p171)ため,芳川は11年4月20日辞任した。

高柳は「金の都合がつかず電車の工事も出来ず,今二三カ月で鉄道省から認可が取消されるという一歩手前」( p22)のため,株価が1株2円にまで惨落していたのに目をつけ,「よし来た,全部持って来いというので城東電車で儲けた二十万円をパラッと投げ出して」( p23),10年9月池上電気鉄道の取締役になり( ),11年4月20日辞任した芳川社長の後任として高柳が社長に就任,「同氏配下の田辺,河野,武井,小林各氏を取締役にした」( )のであった。

城東の場合と同様に,高柳の狙いは悲観説に祟られて底値に落ち込んだ池上電気鉄道株をタダ同然で買い漁り,「やがて成らんとせる東京近郊電鉄会社に池上電車を売りつけて素破らしい儲けをしてやろう」( p57)との単純な転売目的からと考えられる。11年時点の役員は[表-2]の通りである。なお12月6日付で残留していた八木,石黒,富山,志村の非高柳系4重役が辞任した。( 3-1)

高柳は監査役の「大越氏は私の所の元事務員でありましたが,私の所有株五十株を貸して監査役になった」(T14.9.13東日)と,高柳系役員が高柳の完全なダミーと認めている。

高柳時代の池上電気鉄道のスタッフの一人として「多年曉将高柳君の膝下に育った」( ,p56)部下の椎名一司(滝野川,池上電気鉄道新109株主)がいる。椎名は会社員(紳,S3,p370),第二共益取締役で,池上電気鉄道「自称支配人」( ,p58)として「社内の人事と事務とを切り回し」( ,p55),「策略縦横に戦局当面の計りごとをめぐらし」( ,p56)た人材であった。高柳事件後も椎名は「高柳君の唯一の子分なりと称して高柳君の無罪を世間に標榜しつつ,池上電気鉄道の現重役の間に馳駆して盛んに<重役>割り込み運動をなし」( ,p58),「あはよくば社長たらんと聊かあせて」( ,p55)いたが,14年12月念願の池上電気鉄道取締役に就任したものの,池上電気鉄道の大株主たる高柳金融の支配権争奪戦で「河野派の勝利に帰し…孤軍奮闘」( ,p55)とされた。

高柳は5月22日付で10月25日までの延期願を出す一方,「一カ月の間に本門寺まで電車を開通させなければ」( p23)と,部下に指示して用地買収を急がせた。駅の「周囲八地価ノ暴騰ヲ来シ用地ノ拡張甚ダ困難ヲ極メ」<sup>48)</sup>,「用地内に存在する建家二戸」(「延期願」)のうち買収をかたくなに拒絶する居酒屋の老婆には社長自ら交渉に乗り出した。高柳は不動産ブローカーを装って居酒屋で酒を飲み,「婆さん安く売っちゃダメだよ。オレに任せろ,オレに。一番高く売ってやる」( ,p23)と,天才ぶりを発揮した。さぞや老婆の目には高柳の風体は池上電気鉄道の社

48)「特種曲線設置認可申請書」11年10月27日( 2-16)

長様にはとても見えず、怪しげな凄腕の不動産屋そのものに映って、一寸の疑念も抱かなかったことであろう。高柳の迫真の演技力に老婆はすっかり信用して高柳に白紙委任状を手渡し、さしもの用地買収上の難問も一挙に解決、「土地は全部オーケーだ。サア工事だ」( p23 )と着工できた経緯を高柳は得意気に自伝に書いている。もっとも当時の地図では蒲田駅周辺を除けば市街地は見当たらず、沿線は一面の水田地帯であった。自伝では彼が客をコロリと騙した話はこの一か所しか登場しないが、実に描写がリアルであり、筆先だけでなく、高柳が口先三寸でも偉才を放つ演技派であったことがうかがえる。

車両の確保の面でも子連れで静岡に出張して、駿遠電気(12年3月静岡電気鉄道と改称)から新造のボギー車両2両の譲渡方を無理に頼み込んで、即座に快諾させた経緯を生き生きと自伝に描写している。おそらく高柳が城東電気軌道買占めの際に接触した大川財閥の盟主・大川平三郎が静岡電気鉄道の社長を兼ねていたという人脈をも最大限に利用したことでもあろう。「電車の横腹に静岡電車の定紋がついているが...これには鉄道省のお役人が目を回した...これでは何でも難癖つけて電車を止めさせなくては」( p24 )と、監督官庁からの嫌がらせが続き、高柳は「泣く子と地頭にはかなわない」( p24 )とこぼした。高柳の回顧通り開業時の車両数は駿遠電気からのたった2両だけ<sup>49)</sup>、水田の中を走るのでかな単線のローカル電車だった。

かくして、高柳社長自身の言葉によれば「断じて行えば鬼神も避く」( p23 )との不退転の決意の下に、「規程二合致セザル」(「追申書」)曲線半径3鎖の急カーブも断行するなど、法令や通達等に束縛されぬ八面六臂

49) 88) 池上町史編纂会『池上町史』昭和7年、p583,174

の大活躍の結果、秀吉の一夜城ではないが、どうかこうにか11年10月6日単線で池上～蒲田間1.8kmを「池上本門寺のお会式<sup>50)</sup>」の日に開業した。片道五銭の区間だったが、五銭の白銅やら一銭銅貨やら一晩に大きな柳行李に一杯取れた」( p25 )と回顧する。

鉄道省では失効まであと数カ月を残すのみであり、期限内に開業するなど、これまでの役人界の常識から推して「絶対に出来ないと見て」( p24 )、失効必至の「池上電車に見切りをつけて、その線路を早手回しに渋沢敬三さんに認可」( p24 )したと高柳側では観察していた。御会式直前に間に合わせた開業は、池上電気鉄道の内実を計り兼ねていた監督官庁<sup>51)</sup>に対して「たとえ一哩でも開業すれば認可は取消されまい」( p23 )との高柳側からのアピールでもあった。換言すれば、更生不可能と万人が認めていた池上電気鉄道を首の皮一枚つながった形ではあるが、免許失効必至の危機から救出し、蘇生のための道

50) 御会式は弘安5年(1282年)池上で病死した日蓮の忌日を記念して、本門寺で毎年10月11～13日に行われる盛大な行事で、「一夜に京浜の信者五十万を集め、省線電車、池上電車、東京市電は終夜運転を為すの盛況を見る」(前掲『池上町史』p162)ほどの善男善女で賑わいを見せた。なお本門寺住職の磯野日筈は15年4月末現在池上電気鉄道の120株主(「第十八期営業報告書」15年4月、p5)

51) 鉄道省は250万円への増資案を削減させたり、増資の経緯を分析して「四十万円八同然複線工事費ニ充テラルヘキ筈ナルニ拘ラス現在開業線ニ於テ一部分ノ複線モ竣功ヲ見サル状態ニアリ...負債トノ関係ヲ考ヘルトキハ此ノ点モ聊カ明瞭ヲ欠ク」(「増資ノ経緯」大正14年5月29日調)ものと観察していた。ただし、大正7年12月28日の池上～蒲田間の免許の際には逆に「武蔵電気鉄道蒲田支線トハ重複スルモ同鉄道ノ成否未定ニ付キ本<池上>線ノ如ク起業ノ確実ナルモノニ免許可然ト認ム」( 1-20 )との意見が付されるなど、武蔵の方を成否未定と観察していた。もっとも当該部分は奇しくも後に武蔵電気鉄道に天下る総務課長五島慶太が削除している。

筋の第一歩を高柳という特異な才能を持った人物がつけたことを意味しよう。この点に限っては、火事場の馬鹿力かもしれないが、余人には代え難い高柳のある種の更生能力を評価してやらねばなるまい。

11年9月22日完全に並行する目黒蒲田電鉄との競合を避けて、目黒での省線との接続の当初案を五反田での接続に変更すべく申請した。12年4月30日第二期線の池上～雪ヶ谷間3.5kmを「乗客多数ノ便益ヲ鑑ミ...一日も早く...交通ノ便ニ供セン」( 3-14)との理由でまず単線で竣工させ、5月4日開業した。当時の「池上、雪ヶ谷間は全くの武蔵野の広野で...如何にも淋しい」(S2.6.20T)ため、池上電気鉄道は遊覧客誘致のため『池上電車案内』<sup>52)</sup>を発行した。

### 3. 池上電気鉄道の不振

田園都市の住宅地の売行きは絶好調のため、目黒蒲田電鉄の乗客も激増、幹事証券の山一合資は「震災後東京郊外の発展振りは...目覚ましい」が「当社程に発達著しいものは

52)『池上電車案内』は資料 の中で「此の会社の沿線には実に名所旧跡が多い、別紙池上電車案内に見る如く、洗足池は... (中略)...其の他の事は池上電車案内で詳細に御覧を願ふとして」( )とされる高柳が『福の神』に同封した別紙資料に該当すると思われる。『池上電車案内』では例えば「曙楼梅林」を「本門寺五重塔より雑林を隔てて断崖に建造されたる享樹十余棟、長廊之に通じて危欄空に懸る。園内老梅に名あり」と紹介するほか、高等工業学校や、絵図に星製菓、星商業学校の建物をわざわざ描き、「星商業学校(北耕地駅より二町)星一氏の経営せる星製菓株式会社直属の商業学校なり。鉄筋『コンクリート』の建造にして、規模雄大、商業実務教育を施し成績見るべきものあり」などとして、名所旧跡以外の施設も紹介した。ただし経営権が川崎財閥に移った昭和2年10月時点の『池上電気鉄道沿線名勝案内』では沖電気などを描くものの、星製菓・星商業学校は省略した。高柳と星の関係を暗示するように思われる。

他に余り例がありません」<sup>53)</sup>と目蒲の社債を推奨した。

これに対して、並行路線の池上電気鉄道では12年9月1日関東大震災で有楽町1丁目3番地(電話丸の内三八九番)(帝T11,p31)の日比谷ビルディングすなわち「日比谷公園前高柳事務所<sup>54)</sup>に在ったが...大震災の為に...神田区小川町の高柳事務所に移転」( ,p22)した。高柳が「蒲田停車場の石垣が一寸崩れた位のもの、直接の損害は殆んどありません」<sup>55)</sup>と自慢したにもかかわらず、池上では他社と根本的に事情が異なり、『ダイヤモンド』誌は「当社現在線が大都市への連絡もなく、又その沿線に何等の遊覧地も持たない単線三哩四分、二十四分間隔発車の電鉄だから...成績の好くなる筈がない」(S2.6.21D)、『東洋経済』誌も「当社の成績は甚だ振はない。又、振ひ得る筈がない」(S2.6.20T)と断定する。震災直後に「各電車会社が震災ノ影響ヲ受ケ、郊外生活者ノ為メニ僥倖ニモ非常ナ大発展ヲナシツツアル」<sup>56)</sup>13年上期において池上電気鉄道は『営業報告書』の中で、自社の経営方針の誤りを以下のように率直に認めた。「抑も郊外電車ハ、其ノ基点ヲ市ニ接続スルヲ第一ノ要素トス。然ルニ池上電車ハ敷設ノ順序ヲ誤リ、工事ノ簡単ナルヲ理由トシテ終点蒲田駅ヨリ起工シ、現在ノ線路ニ於テ資本金ノ全部ヲ費シ、最早増資スルニ非ザレバ市ニ接続スルコト能ハザル状況ニアリ。従テ市民ノ郊外生活者ハ、

53) 目黒蒲田電鉄「第二回社債募集」パンフレット、14年8月

54) 高柳事務所には「池上電気鉄道、京浜土地、高柳金融、高柳興業」(T14.9.16国民)など「入口の左右に、十数種の株式会社の看板が並んで掲げられていた」( ,p167)とされる。

55) 83) 高柳淳之助『大震災と私の事業』(『交通と電気』2巻10号所収)

56) 57) 池上電気鉄道「第十三回営業報告書」13年上期

直接本鉄道ヲ利用スルコト能ハズ、遠ク省線ヲ迂回シテ僅カニ池上村、調布村方面ニ住宅地ヲ求ムルヲ得ルノミ」<sup>57)</sup>

この敷設順序の誤りについては資料でも「高柳が社長たるに及んで半分の蒲田から雪ケ谷迄三哩五分が開通したのである。開通はしたけれ共線路が未だ半分なので思ふ様な成績の上らぬのは是非もない次第」( )と、高柳としては珍しく弱気を隠さない。

雪ケ谷～五反田間には大園一派による新会社の競願があったが、ようやく14年4月14日五反田での省線接続が認可された。「池上電車は只今残り半分即ち雪ケ谷から東京市の五反田までの工事に着手してゐる。人家が周密なので其の取扱いに目下必死になってゐる...遅くも明年即ち大正十五年四月迄には全通する事が出来ると信ずる」( )とした。時期は未詳ながら高柳個人としても蒲田や「五反田の駅前ほとんど全部を買い占め」(p152)するなど、池上電気鉄道沿線での大口不動産投資を行った。14年12月末には資本金185万円のうち174.9万円が払込済みで、建設費は170.7万円を賄えず、鉄道財団抵当借入金2.8万円、支払手形42.4万円の合計45.2万円で賄うという劣悪な財政状態であった。<sup>58)</sup> 資本金185万円を「今回残り半分に大至急に敷設する為に資本を倍加して三百七十万円とし、其の増加の百八十五万円の内百万円は高柳金融株式会社で引受ける事になりました。尤も只今でも高柳金融株式会社は五十万円以上の池上電車株を持ってゐたところ、今回又百万円を引受けたので、資本金二百万円の高柳金融会社としては少々荷が重くなり過ぎた感があるので、今回一千株だけ遺憾ながら売放つ事にした」( )として、「高柳金融株式会社で一千株を限り、此の株の売出を決行いたします」( )として、「若し夫れ

万々一、大正十七年まで此の利益配当が出来ない時は売主たる高柳金融株式会社は売った値段で株券を御買戻する事を茲に誓約いたします」( )とした。

『交通と電気』誌は「次ぎから次ぎへと絶へず...我流小冊子を発行しては物欲に燃えさかる現代民衆の思ふ壺に投ずべく執筆した」( ,p57)「高柳君の策略」( ,p57)に感嘆するが、「一円から一円五十銭に下落して居る」池上電気鉄道の株式が「高柳より地方へ行くときは四十円近くになって立派に株主名義が書換えられた」( ,p57)結果として、池上電気鉄道の「株主人員二千八百三十七名の多きを算し、北は北海道から南は四国九州に至るまで、少くとも二三十名の株主のない府県はなく、又東京市内でも侯爵徳川頼倫閣下を初め、勝<精>伯爵<sup>59)</sup>、花房<太郎>子爵、高木法学博士なども株主の一人」( )であった。高柳事件の捜索の際に「事務所まで押収した帳簿に全然乗っていない、会員名簿(実は被害者名簿、約一万余名)があったと言われている」( ,p170)が、この際に「池上電鉄の株主名簿其他...葉書の類まで押収」(T14.9.16国民)された。池上電気鉄道の株主名簿は多分に高柳事件の被害者名簿の性格を有するために押収されたと考えられる。

時期はややズレるが、入手できた15年4月末現在では総株主は1,921名に減少し、主要株主は末尾の[表-3]の通りである。属性が不明の株主や、省略した100株未満の零細株主などが事件の被害者に相当すると考えられる。

59) 勝精は徳川慶喜の十子で勝海舟の養嗣子。勝海舟は西郷隆盛と面談し江戸城無血開城を決した因縁から終命の地と定めて晩年洗足池畔の別荘「洗足軒」に住み、明治32年1月20日没(『明治過去帳』昭和10年,p555)。本門寺には星亨銅像とともに徳川家の廟があり、徳川義親侯爵創設の徳川生物研究所も沿線「平塚駅より三町」(『池上電車案内』)に立地する。

58) 『地方鉄道軌道営業年鑑』昭和4年, p164

## ・池上電気鉄道に動員した関係企業

### 1. 日本農工債券

6年5月10日「一、公債社債諸株式ノ募集又引受、二、公債社債諸株式ノ現物売買及ヒ仲介、三、公債社債諸株式ノ割賦販売及ヒ担保貸金、四、有価証券ノ保護預リ及ヒ受渡二関スル代理行為、五、有価証券ノ所有及ヒ『貯金ノ研究』ノ発行」(T6.5.24官報第1442号、p564)を目的として資本金50万円で、神田区表神保町の高柳宅に日本農工債券を設立して代表取締役となった。常務の長谷部耕太郎(本郷区本郷)は長野県青木島村の出身で株式仲買要屋商店を経営し、「広く公債社債株式現物仲買を営み」<sup>60)</sup>、東京証券取引、東京織物市場各取締役(要、T11、上p57)であった。監査役の児島良行(新井村)は高柳系の京浜土地、日本製菓各取締役、日本農工債券監査役であった。(T6.5.24官報第1442号、p564)

高柳は長谷部と提携し、日本農工債券の出張所を日本橋区楓河岸25の高谷部の東京証券取引本社内に置いて(帝T11、p52)関連ノウハウを吸収したようで、後に高柳側で顧客に東京証券取引の「株券を押しつけ」(T14.9.29東日)、昭和2年には高柳の配下の米川清三郎が東京証券取引の取締役を兼ねていた。(帝、S2、p170)

8年12月現在の利益は23,026円、配当1.4%、払込12.5万円、積立金19,400円(通、p122)、11年3月末(第10期決算)では資本金50万円、払込金42.7万円、積立金28,400円、収入44,205円、支出18,322円、当期純益及前期繰越金26,932円であった。(帝

60)『大日本実業家名鑑』、はp16。8年4月要屋商店を改組し東京証券取引と改称した。(帝T11、p126)

T11、p52)「日本農工債券株式会社を金融機関と為し、各姉妹会社の払込み株金その他一切の収入金はこれを同会社に集中し、営業決算期に於ては帳簿上互に姉妹会社の株式売買ありたる形式とし、その評価も擅に計上して恰も正常に会社の業務を遂行し純益を得たものの如く仮装し、一割以上の配当をなし」( )で、「一流上場株の如く装うて、地方人に押付け」(、p169)たとされる。11年の本社は神田区小川町(要、T11、p41)、取締役は高柳、田辺、菅能近一、監査役児島、河野で、すでに長谷部は退任していた。

### 2. 高柳興業

「疑問の中心にある高柳興業」(T14.9.16国民)、「興業、共益の各社は全部空株」(T14.9.16東日)とされた高柳興業は11年8月「鉄道建設其他」を目的として神田区小川町(高柳宅)に資本金20万円で設立された。(帝、S2、p173)『池上電車案内』は沿線における年中行事に「洗足池船遊」を載せ、「近時都人士の来遊するもの日々増加し、近郊随一の遊覧地と称せらるる洗足池は東京府立公園に指定され、「将来大に公園整備を進むることなれり」との有望地と鼓吹する。高柳は「池上電気鉄道沿線の洗足池を中心に一大遊覧地を設けると誇大の宣伝をなし、資本金五十万円の高柳興業会社を創立せんとしたが、応募者少く、遂に資本金を二十万円に変更し...第一回払込金四万八千八百九十五銭を騙取し、何等事業は営まぬにも拘らず...大正十一年十二月末日同会社年一割四分強に当る配当をなし株主をあざむき、第二回払込みを請求し、大正十二年六月から九月迄の間に合計約三万五千円を騙取した...同<十二>年十一月高柳興業会社第三回払込みを請求し約十万円を騙取した」( )とされる。12年上期の池上電気鉄道の業績を分析した『交通と電気』誌は「吾等局

外から測り知れなひ二万五千余円の雑収入がある、会社は運輸の外、他に営利事業をなしつつあるか、この不思議なる収入」(、p23)として、同社を「判断のつかぬ電車会社」(、p22)と匙を投げている。後に川崎系の新重役も昭和2年時点で同社が「延長線完成後は、東京方面から遊覧客を吸引する方策として先づ第一に、其水面使用権を持つ洗足池を遊覧地たらしむべく種々の施設をなす筈」(S2.6.20T)と、高柳興業構想の踏襲を示唆した。おそらく高柳興業の名で取得した水面使用権を同社の整理過程で池上電気鉄道が継承したものである。<sup>61)</sup>

### 3. 高柳信託・高柳金融・大同興業

#### (1) 高柳信託

高柳信託は10年5月神田区小川町に設立された。(要,T11,p152)一審で窪谷検事は論告の中で特に「高柳信託会社の内容を暴露」(S7.11.18読売)したが、高柳自身も公判で「高柳信託を信託法実施一年前に五万円の資本金で設立した」(S7.9.28朝日)と、駆け込み設立の経緯を詳述した。高柳信託は鹿島参宮鉄道の6,280株(31.4%)などを引受けた。<sup>62)</sup>

61) 昭和2年の『池上電気鉄道沿線名勝案内』には洗足池に水上倶楽部が描かれ、「当会社直営の遊船設備もあって」と記載するように、モーターボート(一人十銭)、貸ボート経営の水上倶楽部収入は昭和2年10月期から計上され、3年下期には9,321円、5年下期の水上倶楽部(洗足池貸船)設備費は47,579円、所有船87隻(S6.4.5D)。洗足池畔にはこども遊園地「チンカラ園」(子供五銭、大人十銭)も存在した。(前掲『池上町史』,p175)網嶋滋氏は「昭和の初期には水上の権利が池上目蒲電鉄にあった」(『洗足池』平成7年,p110)とされるが、3年頃までの同社発行の『沿線案内』には記載がなく、兼営事業の内訳にも該当しない。7年時点で定款に自動車、遊園地経営、土地建物売買、賃貸借、貸ボート、日用品雑貨販売を掲げて、不動産業や娯楽機関経営を行っていた。

資料 所収の投書には高柳信託が高柳金融に改称したとある通り、高柳「一流の貯金機関を統一してその発展を計画」(T14.9.15国民)して、高柳信託が「後に高柳第二信託、高柳第三信託と合併し、高柳金融株式会社と変更」( )した。帝国興信所は信託法以前の信託会社について「寧ろ財界の寄生虫...大正九年の大恐慌以来、各地の出来星信託会社は轡を駢べて不始末を演出し、其状恰かも無尽会社の倒壊に異なるなき惨状を示した」<sup>63)</sup>と酷評するが、12年1月信託法の実施に伴い、「従前の信託会社にして今尚(信託の)社名を存続するもの少なからざるも、之等は孰れも信託法に準拠して許可されて居るものでない」<sup>64)</sup>との事情から、やむなく改称・改組したものであろう。

#### (2) 高柳第二信託

11年1月20日麹町区有楽町1丁目3番地に、「特約ニヨリ一定ノ不動産動産又八有価証券ノ信用委託ヲ受ケ、之ヲ管理ヲナス事」<sup>65)</sup>を目的として設立、資本金105万円(払込262,500円)、総株数21,000、取締役高柳、河野、田辺、監査役武井、大越(要,T11,p152)、「公告ヲナス方法」は「東京貯金新聞二掲載ス」<sup>66)</sup>とした。

予審では高柳は「自己の経営せる日本農工債券株式会社及び高柳信託株式会社(後に高柳第二信託、高柳第三信託と合併し、高柳金融株式会社と変更)を利用し新会社を設立し、その払込株金を全部日本農工債券株式会社に集中して同会社より順次にこれを池上電鉄並に鹿島参宮鉄に建設資金として支出し、工事を進捗せしめ、各会社の決算期には巧妙に姉妹会社と相殺勘定を為し、新設会社に大純益

63) 64) 『財界二十五年史』15年、帝国興信所、p8  
~9

65) 66) T11.6.6官報第2952号、付録p4

ありたる如く装ひ、利益配当常をなし、残余の株金払込を為さしめた。即ち工事資金捻出のため先づ…次いで自分は創立委員長となり、配下の河野仙吉、田辺清蔵、武井勝利、大越信雄、松浦百次郎、小林兵庫等を發起人とし、高柳第二信託株式会社(資本金九十万円)創立を企て…合計金二十五万二千八百八十二円の払込みを受け、之を騙取し、同様第二回払込金合計二十一万五千五百余円も騙取し、いずれも池上電鉄に対し貸付金名義で工事費として支出し( )たとされた。

### (3) 高柳第三信託

麹町区有楽町1丁目3番地に、「金銭貸付業土地建物有価証券売買業並之二ニ関連スル必要ナル事業ヲ経営スル事」<sup>67)</sup>を目的として11年5月2日設立された。資本金100万円(払込25万円)、総株数20,000、取締役高柳、河野、田辺、監査役武井、大越(要、T11,p152)、「公告ヲナス方法」は「東京貯金新聞二掲載ス」<sup>68)</sup>とした。予審では高柳第三信託は「大正十年十月資本金百万円で創立の上は年二割五分の配当は容易であると世間を欺き、二千余名が第一回払込み金二十二万八千五百円、第二回払込み金十九万九千六百余円を共に騙取した( )」とされた。第二、第三信託とも池上電気鉄道への資金の迂回のためのSPC(トンネル機関)として相次いで設立されたとみられる。信託会社が変態増資のために第二会社を設立した例は日米信託にも存在するが、第三会社は高柳のほか聞かない。

### (4) 高柳金融

高柳金融は14年頃、高柳「一流の貯金機関を統一してその発展を計画」(T14.9.15国民)して、高柳信託が「後に高柳第二信託、高柳第三信託と合併し、高柳金融株式会社と変更」

( )する形で資本金205万円、105万円払込みで設立された。本社は神田区小川町(高柳宅)で、その後に資本金は250万円となり、池上電気鉄道株売出しの際にも「此の株券を買った方で、他日金融上の必要がありましたら、高柳金融株式会社は此の株券を担保として何時にても御貸出の御求めに応じます( )」としており、高柳「金融会社だけが高利貸をやっていたから、仕事らしい仕事をしてきた」( ,p170)といわれた。のちに司法当局は同社こそ「疑問の中心にある」(T14.9.16国民)と睨んでトラック4台分の証拠書類を押収し、「高柳金融に払込まれた金を自己の預金口座に振替へたり、会社所有の土地を売買した」(T14.9.15国民)( ,p108)事実を把握したと言われる。「金融会社百五万円は自己名義で著服してゐる」(T14.9.16東日)結果、「すでに到潰に瀕してゐる高柳金融会社」(T14.9.28東日)ともいわれた。

こうして14年夏に高柳金融から発行された『利益保証。買戻特約。有価証券の売出し』の印刷物は「池上電車は株価昂騰と利益配当と合せて年二割五分九厘の利回りとならん」「これより有利確実なるものは他に決してあるべからず」「借金しても買って置くべき資産株はこれ」と宣伝に努めた。文中に「此の印刷物は二万枚を印刷して、我が『福の神』愛読者一同に頒布いたしましたから、茲二三週間内には全部売切れになると考へます( )」とあるので、高柳が主宰していた雑誌『福の神』<sup>69)</sup>愛読者自称約2万人に郵送されたことが分かる。筆者が他証券業者発行の日

69) 高柳は富強世界社を創立して明治43年頃から『富強世界』、『東京貯金新聞』、大正4年1月『貯金之研究』(後の『富之研究』)を創刊、『土地の世界』、『一万円貯金』等も発行して、「全国各地数万人に自分経営の会社のぼる株を売りつけ」(T14.9.16東日)た。『福の神』も高柳が主宰した雑誌の一つ

67) 68) T11.8.11官報第3009号、付録p1

報類とともに古書店から入手した資料も郵送上4回折り畳まれ、元の所有者が赤ペンで盛んに傍線を施した状態であり、おそらく『福の神』愛読者でもあった小口投資家が、高柳から郵送された池上電車株推奨のチラシに過敏に反応した様子が見える。

#### 4. 日本共益, 第二共益, 第三共益

11年秋「第二期線工事費を作るため、日本共益, 第二, 第三共益会社を資本金五十万円づつで設立し...結局日本共益から十一万五千六百二十五円株式払込金を騙取し...斯くして池上鉄道工事費を作るため騙取した株金はいづれも高柳金融会社或は日本農工債券会社に払込ませ」( )とされた。このうち日本共益は12年3月、資本金30万円で株式の売買を目的として神田区小川町に設立(帝,S2,p53), 取締役は高柳, 田辺, 小林, 監査役は河野であった。第二共益は12年4月、資本金50万円で株式売買及付帯事業を目的として神田区小川町に設立(帝,S2,p171), 取締役は高柳, 田辺, 椎名一司(14年12月池上電気鉄道取締役就任, 池上電気鉄道新109株主), 監査役は河野であった。11年秋日本共益, 第二共益, 第三共益(3社とも資本金50万円)の新設会社株募集の際に、小冊子『月給五円の小学教員から百万円の富を作った私の経歴』をつくって「如何に不景気でも年一割以上、好景気なら十割位の臨時配当をする旨を記載して内地、支那、満鮮方面に配布」( )した。

高柳は共益3社の各社長として「株式の現物取引並に定期取引を行ひ、大正十二年十二月から十三年一月の間に日本橋区青物町山叶商店から代金合計二十四万八千五百九十一円で引取りたる浅野セメント<sup>70)</sup>の新株四千株を前示三会社に引渡さず、自宅の金庫内に収蔵横領し」( )たが、免訴となった。高柳

の浅野セメントへの関心は高柳と接触ある大川財閥の盟主・大川平三郎が取締役を兼ね、大川一族で5.1%所有する重要投資先<sup>71)</sup>であり、何らかの内部情報を入手できたことも関係がある。

高柳は「震災に遭遇するや諸株式の暴落せるに乘じ、之を買収して巨利を得ると称し、第二, 第三, 第四回株金の払込を強要、株主がその負担に堪えぬのに乗じ、大正十二年十月一日付を以て日本共益, 第二共益両会社株主に対し、共益株は欠損ある故共益株一株十七円五十銭払込済のものを、有利且確實なる鹿島鉄道株一株十五円払込済のものと交換するとて鹿島鉄道株八千株全部の交換を終り...株主が負担に堪えざるに乘じて、株主の持株と鹿島鉄道, 高柳金融株と交換」( ), 「共益三会社が定期取引によって蒙った損金合計七万五千九百五十一円十銭はこれを<三会社に>支払はせ、一方益金として山叶商店より受取った合計一万五千八百九十一円は該社に交付せず自己の取引銀行に預け入れて不当に領収した」( )とされた。高柳による騙取額は日本共益169,377円50銭, 第二共益163,510円, 第三共益184,387円50銭であった。( )

資料 所収の投書には第三共益会社の株式を日本製薬株式などに交換させたとある。共益3社は池上の工事費捻出のために一儲けを狙った高柳が定期取引等のための投資ファンドとして順次設立し、愛読者に売付けたものの、震災の暴落で挫折し、方向転換を余儀なくされたとみられる。しかし乗換の強制は投資家からの苦情を続出させたようだ。

70) 高柳は個人として14年時点で浅野セメント新1,800株主、高柳合資は浅野セメント旧100株主であった。(『全国株主年鑑』15年,p75)

71) 79) 高橋亀吉『日本財閥の解剖』昭和5年,p347~8,328



## ・高柳の失脚と池上電気鉄道の整理

### 1. 高柳事件発覚と高柳淳之助失脚

14年12月「社長高柳淳之助氏個人身上の司法問題勃発した為め」<sup>72)</sup>、同月31日高柳が「詐欺横領事件にからんで」( ,p173)池上電気鉄道取締役を辞任すると同時に、高柳の部下で「高柳淳之助の四天王」( T14.9.29東日)の一人である河野仙吉(旧10株,新6株主)、武井勝利、小林兵庫(新100株主)も池上電気鉄道取締役を解任された。<sup>73)</sup>

同日越山太刀三郎(新100株主)が後任の社長に、益田元亮(旧500株主,新111株主)が専務に、倉田耿介(新100株主)、野村孝(旧500株主,新100株主)、椎名一司が取締役に、氷見谷久四郎(持株なし)、立石知満(旧500株主)が監査役に就任した。<sup>74)</sup>越山、益田、野村らはいずれも東京電灯役員であり、池上電気鉄道への電気代金債権の確保<sup>75)</sup>等が目的かと推測される。しかし越山は15年3月27日高柳問題の「整理を為し得ずして」<sup>76)</sup>辞任、他の役員も立石を除き辞任した。( ,p173)これは「当社<池上>の業績は高柳社長の失脚に依って蹉跌した様に伝えられ

72) 76) 81) 人事興信所編『銀行会社事業興信録』昭和8年,p587

73) 74) 池上電気鉄道「第十八期営業報告書」15年4月,p3。持株は15年4月末現在。総株数は旧8,000株主,新29,000株,合計37,000株。なお『鉄道省文書』には会社側からの「登記事項変更届」(15年1月15日付「池第三号」)に「取締役監査役八全員新任ス」と朱記するものの、当時新聞で連日盛んに報道されていた高柳事件に関する特記事項はなぜか見当たらない。『鉄道省文書』の中で高柳事件に言及された資料は15年9月8日鉄道監督局長宛中島社長・後藤専務連名の「上申書」( 3-64)である。

75) 池上電気鉄道は「電力八東京電灯株式会社池上変電所ヨリ交流四百キロワットノ電力ヲ設ケ...嶺変電所ニテ...電車線二送電」(「竣工監査報告」大正11年10月4日 2-15)した。

てあるが、事実は高柳金融会社の没落と否とに拘らず、経営行詰りの状態にあった...偶々高柳社長の失脚を見るに及び、俄かに金融の道を断たれ、遂に折角の計画も挫折した」( T15.4.5D)のであった。『交通と電気』誌は「蒲田駅前に乗客待合所として予備電車がいつも一台備付けられ...あまり恰好のよいものでない」( ,p22)など、「遅々として諸設備の渉取らざる」( ,p23)同社を批判し、「彼の設備を以て、彼の諸般の運転状態を以て監督官庁の目を堂々と大手を振って過して来た...高柳社長の経営振りの実に妙を得た」( ,p56)怪腕を皮肉った。『ダイヤモンド』誌も「貯金魔と称せられた高柳淳之助」は「元来が真面目に電車事業を営むの意志なく、貯金詐欺のカラクリの種に居たので、単線仮工事のお粗末極まるもの」「真面目に営むると云ふ意志が無かったのだから、高柳に実権のある間は配当など出来る筈がない」( S6.4.5D)と酷評した。

### 2. 川崎財閥の登場

池上電気鉄道は「業績不振の上、株数の過半を所有せる社長高柳淳之助失脚の結果会社は殆ど其中心を失ひ一般株主も会社の前途に渺からず危懼の念を抱いてみた」( T15.3.12読売)ため、「彼の貯金魔...高柳の醜態を暴露するや、自然同社の整理は止むを得ざるもの」<sup>77)</sup>として、「高柳氏失脚後一時社長となった越山太刀三郎氏一派」( S2.6.20T)の役員は15年3月27日の臨時総会で野村、益田、立石を除き退陣し、社長中島久万吉、専務後藤國彦ら「経営の全部を川崎系の手ゆだねることに決定」( T15.3.12読売)した。

中島久万吉は財界の世話役として登場したが、若い頃東株に勤務し、首相秘書官時代に高柳の政界での親分・小山田信蔵の自党裏切りの舞台裏を間近に見たという因縁もあり、

ことの重大性を認識して高柳事件の後始末として引受けたのであろう。また社長をしていた経営難の博愛生命（古河系）の保険契約を6年8月川崎系の万歳生命に包括移転<sup>78)</sup>してもらったという恩義を川崎財閥に負っていた。

越山一派（東京電灯）としては当面の債権確保ができればよく、12年12月営業目的に「沿線ニ於ケル電灯電力之供給及自動車運転」（3-21）の追加を申請しながらも、現実には電気供給を兼営していない池上の支配継続にはさほどの関心がなかったからであろう。本社を京橋区出雲町に移転するとともに事務取扱所を桐ヶ谷の川崎貯蓄銀行ビル内に移した。15年9月8日鉄道監督局長宛の「上申書」の中で中島社長・後藤専務は「弊社現重役八去ル三月末就任後直チ二前責任者タル高柳淳之助氏放漫経営ノ善後措置ニ着手致候処、帳簿中同氏事件ニ関連シテ検事局ニ押収中ノモノ不尠、夫レガ為メ依拠スベキ資料ニ乏シク困惑致候モ、凡ベテ新規出発ノ決心ヲ以テ整理ヲ開始」（3-64）したと述べた。そして「資金ノ蒐集ニ関シテハ川崎銀行ヲ背景トシ其代表者ヲ以テ経営ノ本体トセル現任重役八何等ノ不安ヲ感セサル」（3-64）ものと胸を張った。川崎財閥を分析した高橋亀吉も「川崎財閥の番頭」後藤國彦が専務で、昭和4年上期現在川崎系で14万株中76,369株（54.5%）を所有する池上電気鉄道を「川崎直系会社の支配的の子会社」<sup>79)</sup>と認定した。

このころ「川崎系の東京近郊電車に対する進出は驚くべきものがある」（S4.11.1D）とされ、「事業に危険性の乏しいが為...川崎財閥としては、好適の投資物を欠くわが国に於て、蓋し恰好の放資物を得た」（S4.11.1D）ものと解された。後藤國彦は川崎系の京成電気軌道取締役であったが、「池上電鉄の大改

革と共に、川崎系より、其の衝に当るべき手腕ある人物として挙げられ」<sup>80)</sup>た。川崎系の新重役は「予定線蒲田池上五反田及池上大森間全部八哩の建設も着々具体化する意向」（T15.3.12読売）であった。

### 3. 高柳による粉飾決算の暴露

川崎系の新重役は高柳時代の「不良資産を整理し、評価を更正」<sup>81)</sup>した。その結果、14年12月末と15年4月末の増減を見ると、建設費544,678円の純減（1,707,204円から1,162,526円へ）、受取手形299,445円の純減、仮出金67,623円の純減、3勘定の計だけで911,746円の純減となった。高柳自身も「どんな悪い重役でもごまかして費消することも出来ない、殊に鉄道大臣の厳格なる会計監督を受けるので、尚更ら不正の事は出来ない。さればこそ電車会社で破産したり、潰れて仕舞ったりする会社はない」（ ）と鉄道株の堅実性を謳っていたながら、「吉<芳の誤り>川、高柳両氏の食ひ物になった当社<池上電気鉄道>は昨年上期の如き九十四万八千円といふ欠損を暴露した」（S2.8.15E）のであった。

かねて『交通と電気』誌は、わずか3哩7分の「平坦の田園を通過する線路で鉄橋もなく難工事の隧道もなく、ただこれ平坦線の築造と築堤」（,p23）にすぎない池上電気鉄道の「建設費のあまりに高きことは全国其比あらざるべく」（,p56）と疑問視していた。たとえば駿遠から譲受した「てんで梃でも動かぬ、いかもの車両」（,p56）も「帳面の上では...新品同様の価格で堂々と採算されてゐるのかも知れぬ」（,p56）と疑った。「開業予定期日迄二間二合ハザルニヨリ急キ既成

78) 『本邦生命保険業史』昭和7年,p217

82) 乙号車両に関する11年9月29日付「追申書」（2-14）

品相求メ」<sup>82)</sup>た車両購入は高柳自身が「五ッの男の子と三ッの女の子...二人をつれて...静岡電車会社へ行って古電車二台売ってくれと頼んだ...案外喜んで承知してくれた」( ,p24)と自慢する社長直々の交渉成果であった。また震災直後にも300KW電動機「予備機廃止ノ件」を申請して10月1日付で「何等差支ノ無之」と認可され、「思ひ切り高値に」( ,p56)、「丸焼の城東電車の懇望で二万五千元で譲り渡して八千円儲かりました」<sup>83)</sup>と自慢気に書いている。こうした「消息は一切これを秘めて高柳社長一人の掌中に処理せられ」( ,p56)、「収支採算が常に高柳社長一人の手に左右せられて社内の者と雖もこれを知るを得ざりし」( ,p56)結果、専門の技術者さえも「何も知らずに働かざる」( ,p56)始末だった。『交通と電気』誌は高柳が「己れが主宰者の位置に在るを奇貨となし、関係会社の何れにも二重三重にその会社所属の物資を私的に利用して思ふがままの利殖を自家金庫中に収めることを得た」( ,p57)と結論付けた。この推論に従うと、折よく11年8月に「鉄道建設其他」を目的に設立、車両ブローカーも営める高柳興業などペーパー会社を介在させたものと仮定すれば、池上の帳簿価格など彼の意のままの任意の価格に設定できたに違いなからう。駿遠からの譲受価格との水増し差額は典型的な「水入資本」(watered capital)である。アメリカの初期の鉄道企業では建設部門が別会社で

運営される結果、鉄道本体が用地や軌道を増しされた価格で引取られる弊害がしばしば見られた。<sup>84)</sup>

はたして川崎による整理の結果は以下の通りである。「資産更正ノ中枢ヲナセル八建設費ト受取手形ナリ。蓋シ建設費中ニ実体財産以外ノ所謂想像資産ヲ計上...著シク程度ヲ超過セリ...又資産ノ評価ノ如キモ実價ヲ無視セル跡歴々、蔽フ能ハサルモノアリ。即チ鉄斧ト更正トヲ加フルノ止ムヲ得サリシ所以ナリ。受取手形中ノ大部分ハ回収不能ノ状態ナルニモ拘ラス、依然重要ナル資産項目トシテ計上...回収可能ナリト思料セラルルモノノ外ハ未必ノ資産トシテ備忘価格程度ノ計上ニ止ムヘキモノト信シ整理ヲ断行シタリ。従来仮出金ノ名目ヲ以テ計上セルモノノ大部分ハ当然経費トシテ支弁スヘキ本質ヲ有セリ。斯クノ如キ糊塗ヲ継続スルハ社礎ヲ鞏固ナラシムル所以ニアラスト思料シ、其本質ニ基キ整理ヲ加ヘタリ。負債項目中支払手形及借入金ハ大部分高柳金融株式会社トノ関係ニ繫レリ。期末迄ニ解決ヲ告グル能ハサリシハ遺憾ナルモ、有利ナル解決ノタメ交渉継続中ナリ」<sup>85)</sup>

5月27日の定時総会では当期損失94.7万円の計上、資本金185万円を92.5万円に半額減資すること、建設改良資金として川崎銀行から鉄道財団抵当で75万円を借入れることなどを決議した。(T15.5.28読売)

しかし15年4月末には高柳関係の借入金36,211.6円、支払手形433,987.5円が残留していたので、15年10月期も引き続き、「前期末ニ於テ解決ヲ告グル能ハサリシ旧来ノ債務整理ニ関シテハ鋭意交渉ノ結果、結局一切ヲ解決シテ債務整理金十一万七千六百六十二円余ヲ計上スルヲ得タルヲ以テ、社礎ヲ一層鞏固ナラシムルタメ建設費其他ニ於テ評価更正損失ヲ

84) 米国の鉄道王で投機的金融業者のJ・ゲールドは「株式と社債を乱発したり、会社の経理を意のままに操作」(吳天降『アメリカ金融資本成立史』昭和46年,p31)した掠奪的行為で知られる。「鉄道建設其他」を目的とした高柳興業こそは、かの悪名高い鉄道建設の別働隊そのものを意図したと想像される。初期の武蔵野鉄道でも「重役は私腹を肥さんが為に吾野線を建設した」(前掲『株式会社亡国論』,p299)と指摘され、また割高建設費の男山鉄道が請負契約を締結した日本工業所との関係も疑問視される。

85) 池上電気鉄道「第十八期営業報告書」15年4月,p9~10

計上」<sup>86)</sup>した。債務整理金とは「旧来の債務四十五万円を一時金にて支払ふた結果…債務減額を得た」(S2.1.11D)のもので、高柳側の返済要求額を川崎側で値切って、その額だけ建設費を償却した結果、15年10月期には支払手形は解消された。

#### 4. 川崎財閥下の池上電気鉄道

新経営陣は「雪ヶ谷に於て全く行詰りとなり孤立して」(S2.6.20T)、離れ小島同然の既設線を再生して「近郊電車として採算の採れるやうにする為、蒲田 - 池上 - 雪ヶ谷間の複線化、及び五反田延長線の建設を企画」(S6.4.5D)した。そして昭和2年7月まず蒲田～雪ヶ谷間を複線化し、8月28日雪ヶ谷～桐ヶ谷、10月9日桐ヶ谷～大崎広小路を開通した。この時点の『池上電気鉄道沿線名勝案内』は「来春迄には五反田駅に於て省線と連絡し、更に引続いて市内乗入線として白金猿町品川線の開通を見る筈」<sup>87)</sup>と豪語した。この五反田～白金三光町～下大崎猿町の市電終点間0.8kmの免許は15年12月6日得て、「それから将来品川に出る」(S2.6.20T)構想の下に「実測を了り、弗々土地買収の計画を進めて」(S2.6.21D)いた。新経営陣になってから「設計を変更し、市内乗入れの目的を以て、高架で省線を横断」(S2.6.21D)することとし、「山ノ手線を横断して省線五反田駅に連絡するのに、多額の建設費を投じた」(S6.4.5D)結果、翌昭和3年6月17日大崎広小路～五反田が開通、当時としては珍しい高架ターミナルでの省線連絡が実現、「郊外電車としての機能を発揮し得て、乗客が急増」(S3.12.11D)した。『池上町史』も「池上電

気鉄道が省線五反田駅に接続開通するや、交通の不便は完全に除去され、大東京の中央から半時間足らずして、此の洗足池に接することが出来る」<sup>88)</sup>と好感した。さらに雪ヶ谷～多摩墓地～中央線国分寺駅に至る国分寺延長線(14哩、工費560万円、昭和2年12月16日免許)を池上電気鉄道の将来の幹線と位置付け、その一部分として30万円を投じて昭和3年10月5日雪ヶ谷～新奥沢間の支線を開通させた。池上電気鉄道のライバルである「目蒲の奥沢と田園調布両駅の間へ向って支線を建設した」ことは「目蒲に対して…結果から見れば厭がらせになる」(S4.10.21D)ので、「目蒲当局者の憤慨するの無理ない」(S4.10.21D)と評された。また投資額8万円で2階建、延450坪の五反田マーケットを山手線の内側に建設し、白木屋に月額3,000円で賃貸することとした。(S3.12.11D)昭和3年12月18日白木屋は「当社の五反田駅ビルディングに支店を開設」<sup>89)</sup>し、白木屋五反田分店を経営した。これは「白木屋最初分店であって…開店以来頗る好成績を挙げ、これによって山田<白木屋>専務分店政策に自信を得た」<sup>90)</sup>記念すべき店舗と位置付けられている。昭和11年には地上4階地下1階建に拡張され、売場面積も5,043平米になった。

#### . むすびにかえて

10年9月池上電気鉄道取締役、11年4月社長に就任した後、高柳は高柳第二信託(11年1月20日)、高柳第三信託(11年5月2日)、高柳興業(11年8月)、東京売薬(12年3月設立)、日本共益(12年3月)、第二共益(12年4月)、第三共益(13年ころ)、第二日本製薬(13年4月設立)、高柳金融(14年頃統合)

86) 池上電気鉄道「第十九期営業報告書」15年10月、p12

87) 『池上電気鉄道沿線名勝案内』

89) 『池上電鉄沿線案内』昭和3年10月以降

90) 『日本百貨店総覧』昭和14年、p102

を、従来のピッチよりさらに加速的に相次いで設立したが、これらのペーパー会社の多くは「池上鉄道工事費を作るため」( ) 設立されたと考えられる。もっともらしい名前を考える間もなかったのか、第二、第三を冠した企業の設立など、変態増資や破綻処理等の場合を除けば他に類例がない。

それぞれの名目上の営業目的は多種多様ではあるが、全国各地の零細投資家から払い込まれた上記各社の株金は(大半の高柳の部下も含めて)真実の投資先を知らされないままに、実は解散寸前の池上電気鉄道を救済し、第二期線工事費に流用・転用された。大審院判決の骨子でも「大正十一年秋頃池上電鉄に手を出したが失敗となり、その弥縫策として『一万円貯金』の信奉者から零細な株金を巻上げ...池上電鉄の工事資金に流用」(S10.11.7朝日)したものと断罪された。

筆者は当然ながら、高柳の行為の是非を当時の法制下で法律的に云々する立場にはなく、また議論する能力もないから、彼の経済行為の経済的意味を総体として把握するだけにとどめたい。

彼の行為は要約すれば 得体の知れぬ泡沫企業を多数捏造し、事情に疎い地方の零細投資家を唆して株金を払い込ませ、その代金を自己の利益を図る目的で危険な事業に流用したことの3点となる。司法当局はこれらの行為を別々に観察して、詐欺、背任、横領などに該当すると判断したと考えられる。「予審決定書」では高柳は「帳簿上互に姉妹会社の株式売買ありたる形式として、その評価も擅に計上して恰も正当に会社の業務を遂行し純益を得たものの如く仮装し一割以上の配当をなし...購読者に高柳の経営会社は総て有利且つ確実なりと誤信させ」( ),投資家を欺いたとされる。一審の公判で窪谷検事から「自分の設立した各会社の業態をしらみつづしに追究され」(S7.9.28朝日)た高柳は、高柳

信託の設立経緯などを詳細に述べたが、「過大評価の点は極力否認」(S7.9.28朝日)した。

こうした泡沫企業の実施した「何等事業は営まぬにも拘らず」( )10%超の配当できた実質的な財源は、高柳が城東電気軌道の株式を底値で買占めて、経営陣に高値で買い取らせた巨額の実現利益などから捻出・充当したものと考えられる。高柳は二匹目のドジョウを求めて失効寸前の池上電気鉄道株式を底値と信じて買占め、再生に努めたが結果として失敗した。もし、高値売却が早期に実現できたと仮定すると、泡沫企業のタコ配当継続の財源にも大いに利用されたものと推測される。

高柳の数少ないウォッチャーである深海豊二は高柳の一連の行為を「今日謂うところの『投資信託』を説いたものである...彼が真面目な事業としてやったのなら、今日の『投資信託』の始祖という事にもなるのだが...」( ,p166 ~7)と、その近代性に言及しつつも、「最初から大衆を食う目的であつたらしい」として「利殖カラクリの始祖」と結論づけた。一審の窪谷検事も論告で高柳の「手段は単なる誇大広告ではなく...その巧妙さには当職もただ驚くばかり」(S7.11.18朝日)と投資スキームの複雑さに感嘆の声をあげた。

高柳の投機的行為を弁護<sup>91)</sup>する趣旨ではないが、深海説を若干敷衍して高柳の頭の中の構想を現代的な用語に当てはめてみると、クローズド・エンド型の会社型投資信託もどきのSPCを多数設立し、第一××、第二××、第三××などと社名を同一シリーズとして命名し、投資家の所在地域や性格等に合わせ、言葉巧みなダイレクト・メールを多種多用に使い分け、投資信託の豊富な品

91) 高柳事件の弁護人は明大総長でもある鶴沢聡明(岩手銀行頭取・中村治兵衛等の弁護人)、法律新報社の主筆でもある山内確三郎(弁護士、山内法律事務所主)

揃えの中から推奨販売し、委任を受けた信託財産を主に、株式や不動産の売買で運用した。とりわけ低位株、低迷株への集中投資を行い、自らが経営者として投資先に乗り込み、企業再生に努力して、株価の高騰した時点で利食いしようとしたものと考えられる。結果として、零細投資家は今日でいうならハイ・リスクの“企業再生ファンド”の一種に、それと知らずに投資させられていたといえるだろう。

高柳の行為は1949年最初の企業再生ファンドを設定して、米国の「ハゲタカ投資家」の元祖とされるマックス・ハイネが、その商法開発の契機となったとされる1929年の大恐慌で「倒産した鉄道会社の債券を購入した」<sup>92)</sup> 1930年代初頭よりも、高柳が倒産寸前の池上電気鉄道の株式を購入し取締役になった1921年は約10年も遡る。したがって高柳は単に米国の企業再生ファンドにヒントを得て、これを直訳・模倣したわけではない。

また非上場株式の場外取引という点だけで見ても、「坂本市場」や「ヘタ株」<sup>93)</sup> 取引に先行しているが、昭和12年7月藤本ビルブローカー証券による民法上の組合として創始された藤本有価証券投資組合<sup>94)</sup>、昭和16年11

月英国のユニット・トラストに範をとった野村証券による投資信託、戦後の会社型投信、近年の企業再生ファンド等の創始に四半世紀ないし半世紀も先立つものであり、正規の学問を満足には修めていない彼一人の知恵だけで創造したものである点で、複雑な犯罪を手掛けてきた担当検事も驚くほど、金融商品の新規開発に関してある種の天才的な創造性の持ち主として評価することもあながち不当とはいえないだろう。

しかし以上にみたように、免許失効寸前の“死に体”の池上電気鉄道を更生して、売却可能な完成した商品に仕上げるまでには予想外の手間暇がかかり、「策士、策に溺れる」のたとえ通り、策略を使いすぎた高柳の足をすくう原因となった。本人は敗因を「金融上に少し無理があったため」(p26)とあっさり片付けるが、いかに策略に秀で、策を弄する策士ではあっても、所詮個人商店の域を出ない「高柳王国」の場合、高柳一人の巧妙なる筆先一つで金融操作するには、彼の創作になる無数に生み出された虚業群の決算操作の場合とは異なり、社会資本としての池上電気鉄道という晴れ舞台は巨大な現物にすぎた。余りに経験不足、信用不足、身分不相応である上に、監督官庁、経済誌・専門誌を含むジャーナリズムからの厳しい監視・批判も続出し、顧客からの苦情の投書、内部告発、部下の離反等を直接的な原因として、「飛ぶ鳥を落す勢」(p1)いで、筑波山の上空まで舞い上がっていた“貴族院議員”高柳閣下も「高柳王国」の操作不能に陥った。自ら「一朝運が悪くなれば実に釣瓶の逆落し、山から転げ落ちる岩石の、どこまで落ちて行くか自分でも恐ろしい程」(p1)と告白する通り、喩えてみれば筑波山上空から悶絶しながら一気に洗濯池の底まで墜落したと言わべきであろうか。

92) ヒラリー・ローゼンバーグ著、松尾順介ほか訳『ハゲタカ投資家』平成12年、日本経済新聞社、p18

93) 戦後「ヘタ株」取引専門の非会員の証券業者が、企業再建整備期に第二会社の設立が相次いだ時期に、非上場株式の場外取引を開始して、あまりの投機的な乱脈運営が問題となりスターリン暴落等を機に、「坂本市場」の場合と同じく市場は崩壊した。なお戦前の場外現物商の場合でも「多くは資力信用に乏しく、詐欺横領、文書偽造等の不正行為がみられた」(二上季代司『日本の証券会社経営』平成2年、p29)ため、当局の摘発を受けた。

94) 『大和証券百年史』平成15年、p80～参照。藤本の先行事例でも領域を蚕食されたと感じた信託業界から信託業法への抵触の疑念が出された。(『証券外史』昭和46年、p32)

表 - 1 池上電気鉄道役員・相談役・主要株主 (大正10年3月時点)

氏名	株数	備考
[専務] 八木恒蔵*	207	会社員, 11年では池上電気鉄道取締役のみ
[取締役] 石黒景文* 武永常太郎 田中庄一郎	200 200 1500	相談役の石黒慶三郎の関係者か 主任技術者, 気仙水力電気取締役技師長 大阪府今宮町, 池上の電車等の購入先の日本電機車両, 北日本拓殖, 大和石油各取締役, 秋田電気軌道代表取締役
[監査役] 志村保一 藤倉桂助 山村昇	100 200 500	質屋, 戦友共済生命, 中外貯金銀行, 日本農産工業各監査役 下大阪, 電線製造, 荏原土地取締役, 五反田自動車監査役 本所区番場町, 東洋興業取締役
[相談役並に重なる株主] 吉村鉄之助* 石黒慶三郎* 田沢巳之吉 綿貫助次郎 森久太郎 村上重三郎 伊藤泰二郎 徳川頼倫 勝精 花房太郎 山本唯三郎* 福永文之助*	300 150 200 ... ... 100 100 100 50 ... 1000 100	芝区, 代議士, 大津市生れ, 電気諸機械製造・輸入商吉村商会, 江若鉄道各社長, 箱根土地, 東京乗合各取締役 芝区白金猿町, 共立電機電線取締役, 荏原土地相談役 渋谷町 東京電気瓦斬社長, 共立電機電線取締役 下谷区西町, 荏原土地社長, 土地商会代表取締役 赤坂区氷川町, 荏原土地監査役, 新栄印刷取締役, 群馬県丹ケ原鉱山主 日本橋区, 村上商店代表取締役 金原銀行, 深川銀行各取締役 候爵, 十五銀行取締役 赤坂区氷川町, 伯爵, 徳川慶喜十子で海舟養嗣子, 洗足池別荘主, 十勝開墾, オリエンタル写真工業各取締役, 浅野セメント監査役 子爵, 海軍少将, 貴族院議員 松昌洋行, 高尾鉄工所各社長, 朝鮮電気興業取締役 京橋区尾張町, 帝国連合電球監査役

[凡例] \*印は大正5年9月末現在の池上電気鉄道発起人・賛成人(「発起人・賛成人引受株数調書」1)  
[資料] 池上電気鉄道新株募集広告(T10.3.13読売), 持株数は大正8年10月末現在の「株主名簿」(『大正八年度  
下半年営業報告書』), 肩書きは要T11, 帝T11, 『改訂日本鉱業名鑑』6年ほかによる。

表 - 2 池上電気鉄道の役員 (大正11年時点)

氏名	備考
社長高柳淳之助	姉妹編参照
専務八木恒蔵	前出
[取締役] 石黒慶三郎 小野兵庫 河野仙吉 武井勝利 富山康五郎	芝区白金猿町, 共立電機電線取締役 神田区神保町, 高柳の秘書, 高柳第二信託発起人 牛込富久町, 東京貯金新聞, 京浜土地, 東京土地改良, 高柳第二信託ほか取締役 四谷区伝馬町, 日比谷ビル, 京浜土地, 東京土地改良, 第二, 第三信託, 日本製菓各監査役 深川区常盤町, 日本亜硫酸工業監査役
[監査役] 志村保一 大越信雄	牛込区弁天町, 前出 牛込区富久町, 元茨城県郡視学, 東京土地改良, 高柳第二, 第三信託各監査役
[監査役] 高木金蔵 中井川吉治	大越信雄の後任監査役, 神田区の金物商 高柳の顧問弁護士, 高柳金融の新監査役

[資料] 池上電気鉄道「登記事項届」大正12年1月10日(3), 池上電気鉄道「第十七期営業報告書」大正14年  
10月, 「第十八期営業報告書」15年4月, 帝T11ほか

表-3 池上電気鉄道の100株以上の主要株主(大正15年4月末現在)

氏名	株数	備考
#後藤國彦	旧370新5,630計6,000	15/3専務,京成,日華生命各取締役
高木貞一	旧63新886	牛込区喜久井町,日本精工取締役
内海穎二	新800	牛込区 有価証券売買業
*高柳金融	旧13新661計674	取締役大浦秀(山東製油専務ほか)名義
益田元亮	旧500新111	取締役,東京市街鉄道技師,東京市電主任技術者を経て,東京電灯営業部次長,小田原急行鉄道取締役
野村孝	旧500新100	取締役,東京電灯取締役,信越電力監査役
高木益太郎	新515	代議士,弁護士,遠州鉄道取締役
立石知満	旧500	監査役,荏原郡下大崎,米穀商,府会議員
安藤重次郎	新500	長野
#高橋熊三	旧500	15/3取締役,川崎系の東京倉庫社長のほか,日魯漁業,三協銀行各取締役,後に相生無尽社長,日本火災取締役
中島久万吉	旧500	15/3社長,貴族院議員,横浜電線社長ほか
#高梨博司	旧500	常任監査役,川崎家の番頭,川崎第百銀行常任監査役
#上原鹿造	旧500	15/3取締役,弁護士,代議士,京成取締役,万歳生命監査役
清水雄次郎	旧30新370	清水合資代表社員,並木製作所取締役
高柳直兵衛	旧200新150計350	合資会社高柳保財会代表社員
畦上千代	新304	千葉
武永常太郎	旧200	10年3月時点で取締役,麻布区,会社員
金光庸夫	新200	15/3取締役,大正生命,日本教育生命各専務
斉藤清助	新200	東京株式取引員
西野市兵衛	旧190	福井県岡本村,紙・生糸 西野商店社員,大和田銀行監査役
荒城敬三郎	新180	荏原の資産家
山田操	旧2新173	
木村錦一	旧2新149	
樋田節三	新150	長野
小島善之助	新150	千駄ヶ谷の資産家
松尾慎二	旧40新110	日之出商会代表社員
福田恵一	旧10新120	
磯野日筵	新120	本門寺住職
相浦まん	旧10新100	
*椎名一司	新109	滝野川,支配人,新取締役,常務
徳川頼貞	旧100	上大崎,侯爵,貴族院議員
越山太刀三郎	新100	新取締役,芝区高輪北,東京電灯出身,越山合資無限社員,東京電灯,大和毛織各取締役
倉田耿介	新100	新取締役,越山 社員,銀座高田商会社長
*武井勝利	新100	監査役,前出
*小林兵庫	新100	取締役,前出
<以下 参考>		
高木金蔵	旧15新80	監査役,前出
*日本農工債券	新90	取締役大浦秀名義
勝精	旧50	伯爵,前出
*田辺清蔵	新50	監査役,日本農工債券,高柳第二信託ほか取締役,京浜土地ほか監査役
*大越信雄	新50	監査役,前出
*河野仙吉	旧10新6	取締役,日本製薬,東京電話,東京売薬各社長

[凡例] \*印...高柳系, #印...川崎系

[資料]「第十八期営業報告書」15年4月,池上電気鉄道「登記簿抄本」大正15年1月14日(3-41),「履歴書」(3-50),松下伝吉『中堅財閥の新研究』昭和12年,中外産業調査会,勝田貞次『川崎・鴻池コンツェルン読本』昭和13年,春秋社,帝,T11,商,T15,紳,S3ほか